

ひだまりでの活動を通して

社会福祉学部社会福祉学科 2年 鈴木 優香

活動先：NPO 法人 ひだまり

ゼミ：野尻 紀恵 先生

今回の6日間の活動を通して強く実感したのが、利用者さんひとりひとりに考え方や特徴があること、それを優先して動くこと、また活動先での職員さんのひだまりに対する熱い思いだった。

私にとっては実際の現場に行って利用者さんと直接関わるということ自体が初めてのことだった。活動が始まる前は自分なりに「利用者さんの考え方優先で動く」とわかっているつもりになっていたが、実際その場にいると自分がどう動くか自分の中で勝手にイメージしてしまっているときがあり、職員さんの利用者さんに対するとっても自然な対応を見て自分との違いに気づかされる瞬間が何度もあった。

そうした中で特に学んだのは、自分からどんどん話しかければいいというものではないということだった。初日は沈黙はいけないことだと勝手に思い、緊張もあってか色々利用者さんに話しかけていた。今思うとどうでもいい質問なども含んでしまっていたかもしれない。しかしそうした様子を見ていた職員さんから「自分からはなしかけることばかり考えなくていい。むしろ利用者さんの話をたくさん聴くこと」というアドバイスを頂いた。沈黙になっていたとしても、元々のひだまりの雰囲気も穏やかなもので、冷静に考えてみればその沈黙を苦だと思っている利用者さんもいなかったと思える。それこそ私の勝手な思い込み（先入観）だった。言われた通りに自分は聴く側の意識で利用者さんと接していると、自分の身の回りのことや子どもの頃のお話、自分が好きなもののお話などたくさんのお話が出てきて、何より利用者さん自身が自分が喋っているときが一番楽しそうだったのが印象的だった。

また、一日の流れの中でレクリエーションの時間が長いのだが、レクリエーションの時間に自分の好きなことを優先してできるというのも少人数で過ごすひだまりならではの感じた。レクリエーションの内容は毎日決まっているが、全員が全員必ず同じことをしなければいけないわけではない。例えば私が活動した日には“お習字”という時間があつたのだが、お習字が好きでないという利用者さんもおり、そういった方にはひとりひとり声をかけて何がしたいか聞いたりした。したがって、お習字の時間に編み物をしたり絵を描いたりしている利用者さんも見られた。自分で思いつかない場合は職員さんから提案された物の中から選んだりもできる。一日の時間配分は決まっているものの行動の選択肢を広げて、利用者さんの今やりたいことを利用者さん自身が決定できるのはいいことだと思った。利用者さんの表情を見ていても、自分の好きなことをしているときは目が輝いており、口数も多く「自分はこれが好きなんだ」と楽しそうに話してくださった。こうした環境が

ごく自然に作られていることが重要なのだと感じた。

私自身が勝手なイメージで、今となっては失礼なことだが「何かをしてあげる」精神を持っていたのかもしれない。利用者さん自身の考え方優先とっておきながら、実際自分がどう動くべきか結局現場に行くまではわかっていなかった。

今回の活動では学生企画として利用者さんと一緒に近くのショッピングモールで買い物をする、という買い物支援を行った。ひだまりでは今までに買い物支援をしたことがなく、初めての試みだったということで、当日までには2回の下見を行った。下見の際にはトイレの位置や様式、エレベーターや駐車場の確認を行ったが、2回の下見を終えても当日何が起こるかわからない以上は不安で仕方なかった。しかし当日は時間はあっという間に過ぎていき利用者さんも学生や職員さんを置いていく勢いでぐんぐん歩いて店中を回って楽しんでいる様子だった。また当日は1000円という上限金額を定めて買い物をする決まりになっていたが、利用者さんを見ているとどんどん好きなものを籠に入れていくかと思いきやきちんと計算されていたりと、こちらの心配をよそに大変スムーズに買い物が進んだ。買い物自体が久しぶりという利用者さんがほとんどだった。

当日の朝にひだまりから出たくない、買い物に行きたくないと言っていた利用者さんが一名おられたのだが、行ってみると誰より生き生きとしており、帰ってきてからも楽しかったとずっと仰っていて、この企画が意味のあったものだったと感じられた。

今回の買い物支援を通して利用者さん自身に楽しんでもらうことはできたと思う。しかし、その先が重要なのだということを学んだ。「楽しかった」で終わるのではなく、外出ということにどういう意味があるのか、どういう内容が含まれるのか、地域に出ることの意味も考えなくてはならない。例えば買い物ひとつだけでも利用者さんにとっては歩行訓練にもなり、計算は脳を動かすことにもなる。また直接的に強く意識していたわけではないが、今回の買い物が少しでも地域へ出かけることになったと思っている。いつもひだまりの中で過ごしている利用者さんが地域へ出て活動することも、時々取り入れていくことでつながりを作るきっかけになればと思う。買い物支援は本来重要な支援方法とされているらしく、利用者さん自身の支援、地域への進出どちらの意味も含められたと思う。

地域にこうしたNPO法人という場所があることを住民が知ることは重要である。逆に、NPO法人自体も地域の支えありきなのだ。ひだまりで過ごす中で、そしてその職員さんと関わる中で、私はそう強く感じた。

6日間という短い活動だったが、内容は濃いものだった。職員さんは利用者さんのことを熟知しており、利用者さんひとりひとりのこと、地域のこと、制度のことなど、私たちが尋ねると真剣に答えてくださった。その答えは、あたかも当たり前のように語られているが、実はそうではなくて、今までの積み重ねがあり、さらには熱い思いがあって今があるのだと感じた。同時に自分も将来そうなりたいと思った。